

評価及び取組報告書

令和8年1月15日

認定こども園道和幼稚園

園長 雑賀 由希子

次のとおりわかば環境 ISO の取組結果を報告します。
評価結果を踏まえ、継続的な取組に努めます。

1 取組の紹介

共通メニュー		
省資源	省エネ	ごみの減量化
<ul style="list-style-type: none">・教職員の使う書類は裏紙を使用。・自由あそびの際の折り紙は広告で作っておき使用する。お絵かきの紙、紙飛行機の紙などは広告などを使用する。・どろんこ遊びや、畑での作業の後には、まずバケツに溜めた水で手の泥を落としてから、水道で洗う。・絵の具を片付ける際には、筆等を新聞紙で拭ってから、少ない水で洗えるようにする。・おもちゃや衣類などはすぐに購入するのではなく、教職員や保護者から寄附していただきリユースする。・植物の種をとっておき次年度使用する。	<ul style="list-style-type: none">・部屋を使わない時は電気とエアコンは消す。・電化製品は使用しない時はコンセントを抜く。・手洗いのあと、水をすぐ止める。	<ul style="list-style-type: none">・教職員はマイボトル持参（ペットボトルのゴミゼロ）・空き箱等の廃材を使用し、おもちゃ作りや入れ物にリユースする。・給食を残さず食べられるように量を調節し、ゴミを減らす。・壊れてしまった入れ物やおもちゃなどすぐに捨てるではなく安全に使えるように直す。・牛乳パックで虫かごや木の実採集の箱を作る。
独自メニュー		

【少ない水で手洗いをする意識が持てるように実験を行う】



1. マーカーで手に絵を描く



2. バケツの中で手を洗う



3. ペットボトルに水を移す



4. 実際に使った水の量を確認する

【実験方法】

手洗いをする際にバケツを置き、その中で手を洗い、使用した水をペットボトルに移し替えどのくらいの量を使っているのか把握した。教師(あえて多めの水で洗う)や友だち同士で1回の水の使用量を確認した。

洗い仕方、水の使い方の確認は日々の保育でも行っているが、自分たちがどのくらいの量を使っているのかを子どもたちと目で見確認することで、意識が高まり、「先生より少ない水で洗えた」「次はもっと少ない水で洗えるようにする」などといった感想が自発的に

【ふうせんかずらの種からグリーンカーテンを作り再度種を採取】



1. いただいた種を鉢に植える



2. 成長したら花壇に植える



3. 毎日の水やりを欠かさずする



4. ふうせんかずらが茶色になったら摘み、種を取る



いただいた“ふうせんかずら”の種を鉢から育て、葉が出てきたら花壇へ植え替えし、グリーンカーテンを作った。

種がだんだん大きくなっていき、緑色から黒色に変わっていく様子を発見したり、種を取り出したり楽しんだ。

取れた種を来年度、また種植えから行い、植物の成長を楽しみたい。また、一つのふうせんかずらから3つの種が採取できるため、子どもたちが持ち帰ったり、近くの保育園にプレゼントしたりした。

【種もみからお米を作る】



1.種もみを発芽させる



2.プランターに発芽した種もみを浅く植える



2.土が乾かないように水をあげる



2.穂が金色になったら収穫



5.乾燥させるためはさがける



6.乾燥したらすり鉢とテニスボールで脱穀する



玄米完成！



7.脱穀して取れた玄米と白米を合わせて炊き、おにぎりして食べました

種もみから毎日水替えをして発芽させる。芽が伸びてきたらプランターなどに発芽した種もみを浅く植える。水やり当番の園児が水やりをする。(土から2センチ程の水)毎日欠かさずあげる。日当たりの良い場所の方が穂のつきがよかった。

少しずつ大きく伸びる穂に最後は身長を抜かされる園児もいて、成長を喜んでいた。

種もみから稲まで長い時間をかけて育て、さらに脱穀してやっとお米になる工程を子どもが体感し「お米を作るのって大変なんだね」「大事に育てたお米残さず食べよう！」などの声が上がった。“いただきます”の意味を改めて伝えると気持ちがよりこもったようだった。

お米にはそれぞれ名前があることも伝えらると『どうわ米』と名付けて“どうちゃん”と呼んで親しみを持っていた。

【苗からトマトを作る】



1. 苗を鉢に移し、毎日水やりをする



2. 小さい緑のトマトが少しずつ黄色そして赤へ色づいていく



3. 収穫したトマトを給食時に試食した

苗を鉢に移し、毎日欠かさず水やり当番の園児が水をあげた。

葉っぱだけの苗が緑の実がなり、少しずつ増えて大きくなる様子を見続けていた。「トマトが出来てる!」「また増えたよ!」と実を発見するのも園児だった。

赤い実が変わっているのを見つくと、「早く食べたいね」という声も聞かれた。鳥などに食べられてしまうと残念そうにしていたが、その分赤い実を見つけたらすぐに収穫する意識が強まった様子が伺えた。

実がたくさんなるとみんなで採取し給食の際に試食した。今まで苦手だった子もみんなで作ったトマトだからと食べてみると「おいしい!」と食べられる子もいた。今回のトマトづくりでは、苦手意識のあるトマトを克服できた子もいた。また、水やりだけでなく、鳥や虫などから守る難しさも知り、より食べ物を作ってくれる農業の方たちへの感謝をこめて食べることができた。

2 講評・評価者からのアドバイス

評価者： 学校（園）長 教職員 その他（ ）

次の項目について、気づいたことや受けたアドバイス等を御記入ください。

P 計画 役割分担やメニューの 決定等について	食物の大切さを体験的に学ぶ。
D 実施 取組内容や取組方法について、 全員で協力しているか	先生方にアイデアを寄せて頂き協力を得て実施することができた。 また各学年の園児・教職員が保育の中で取り組むことができた。
C 記録・確認 取組状況を把握し、 確認をしているか	写真での記録をしっかりと残しておくことが出来たことで取り組み状況の確認が スムーズにできた。今後も活かしていく。
A 見直しの反映 昨年度の見直し結果が今年度の 取組に活かされているか	給食を残さず食べることが定着してきたことを受け、食べ物や給食づくりにかか わる方々への感謝の気持ちを育むため、栽培活動を子どもたちと一緒にいった。
その他	

3 1年間を振り返っての感想 *児童、生徒、園児に感想を聞き取りの上、御記入ください。*

子どもたちは水や食べ物の大切さを体験的に学ぶことができた。
栽培活動や実験を重ねる中で食材や作ってくれている方々への感謝の気持ちが育ち「いただきます」の挨拶にも
心がこもるようになった。体験を通して学ぶことへの大切さを改めて感じた1年だった。

4 来年度に向けて（見直し結果）

ふうせんかずらの取組みでは園庭だけで行ったが、立派なグリーンカーテンになったので、来年は園舎の一部
を日陰にできるように配置をし、規模を大きくしていきたいと感じた。
また、今回、トイレなどの電気を消灯する意識づけで、電気のスイッチにシールを貼り消すとシールが合体し
自然体になるという『ナッジ(Nudge)』方法を取り入れたが、シールが貼ってある不自然さに子どもたちが剥が
してしまうこともあり上手く実現できなかった。来年度は貼り方や伝達を工夫して改めて実験ができればと思
う。